

---

件名： 平成 18 年度ユビキタス食の安心・安全システム開発事業  
第 4 回ユビキタスシステム開発検討委員会および最終評価会  
日時： 2007 年 3 月 22 日（木） 13：30～18：45  
場所： 航空会館 703 会議室

---

- 開会・挨拶（略）
- 最終評価方法の説明（略）
- 開発実証団体による最終報告（非公表）
- 評価結果についての意見交換

(1) 全般

【発表の重点が情報システムに偏りがち】

委員 E：トレーサビリティシステムと言った場合、識別をどうするが、ロットをどう定義するか、ものの流れをどう整理するか、ということまで含めてシステムであるのに、ベンダーさんが話される時のシステムという、情報システムと言うことになってしまっている。そこからまた理解しなおしていただかないといけない。

農水省：どこのチームの中でも情報システム出身の方でないと情報システムについて理解できないので、必然的にシステム会社の人が発表しているのではないかと思う。

委員 E：これからは情報システム会社以外の人が発表するといった注文をつけたい。

委員 A：本来は受注した人が発表すべきだろう。

委員 F：現状がこうで、何がどう変わったかというところまで発表していたところが少なかった。

委員 H：情報システムへの補助だと誤解している。業務モデルへの補助だと思うと、違ったプレゼンテーションになるだろう。業務モデルの説明と、それをシステムがどうサポートしているかという説明を要求する必要があるだろう。

委員 F：3月の末になってから実証というのは遅い。

委員 H：最初のシステムスペックを入れるまでに時間がかかり、システムを織り込んでいく時間もかかり、その間に業務モデルが変わっているのだろう。ユーザーさんが抜いたり色々変わっているようなので。最初からモデルがしっかりしているともう少し早くから実証ができるだろう。

【トレーサビリティにおいて重要なポイントの機器開発、及びコーディネートの必要性】

委員 H：①一気通貫のモデルをつくるケースと、②クリティカルなポイントごとの機器を作り、その間でのデータ交換を容易にするケースがあり、対照的だった。web でやっているもの（①）は、1日に多量に受入れるものには対応しきれなくなると思われる。従来は①のアプローチが多く、②はある意味斬新という印象を持つ。ひとつひとつの機器にトレーサビリティの機能が落とし込まれている方がユーザーとして

は楽なはずであるし、パーツとしての機器を開発しなければ普及がないだろうという観点でやっている。

委員 J: 分散させているものをまとめるにはコーディネータの役割が大きい。団体によっては、コーディネータの働きによって現実的に動きそうな業務モデルに近いものができてきているように感じられた。

## (2) 団体別のコメント(非公表)

□閉会 (略)

以上